

# 湊江小学校 外国語・外国語活動研究通信

まだまだ残暑厳しい毎日ですが、先生方におかれましてはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。  
さて、今年度の2回目の本校の研究授業を清水 貴美子教諭が行いました。コロナ禍ということで、体育館での授業、zoomによる研究協議、指導講評でしたが、振り返りカードの活用、評価等について活発な意見交流が行われました。  
指導講評では、昨年度からご指導いただいている、外部講師より具体的にご指導いただき、研究を深めました。

## 研究主題

関わり合い、学びを広げ、深める児童の育成

～思いを豊かに表現できる授業づくりを通して～

授業者:3年1組 担任 清水 貴美子 教諭  
単元名:Unit 4 I like blue. 好きなものを伝えよう (5/5)  
指導講評:外部有識者  
〈授業の様子・板書〉



協議会では、研究経過報告と清水教諭の自評があり、本時についての協議へと続きました。

### 〈研究経過報告〉

- ・自己紹介をすることをゴールにもってきたことで、伝える・尋ねるという活動をどのように活動の中で、繰り返し行うことができるかという視点で協議を重ねてきた。TAの先生と授業後にその時間の振り返りを行い、次時の打ち合わせをした。
- ・指導案に関しては、講師に主活動(自己紹介)につながる活動はどのようなものがよいかご指導をいただき何度も練り直しをしてきた。
- ・研究の視点で大切にしてきたことは、
  - ①振り返りカードの活用
  - ②エンドプロダクトの提示
  - ③くり返すつかってみたいと思わせる工夫 この3点を意識して授業作りをしてきた。

### 〈授業者自評〉

- ・様々な実態の児童がいる中で、なかなか Yes, I do. No, I don't. の答え方が入っていかないことを本時まで悩んでいた。
- ・言えるようになったフレーズが増えて、児童たちはうれしかったのではないと思う。
- ・研究の視点にもある振り返りカードを活用し、一人一人の習得状況を把握してきた。一人一人をみとって、授業の中で支援していくことの大切さを実感した。

### 〈研究協議〉 ◎良かった点 △課題点 □質問

- ◎単元計画等の掲示物が素晴らしかった。視覚にうったえ、わくわくする掲示物が一つ一ついいに作られていた。
- ◎自己紹介ブックは、学んだこと、子供たちが自分の言いたいことを迷わずに言うことができるものであった。
- ◎自己評価は、完璧にできたにつけていた子が7割くらいいた。それだけ自信をつけさせることができたのは素晴らしい。
- ◎だれでしょう(Who am I?)クイズは、ほとんど日本語を使わずにできていた。発話・掲示物・ジェスチャーのみで児童が理解できていた。

▲No, I do.と間違えた表現で発話している児童がいた。全体で確認すべきだったのでは。

▲AとBに分かれて自己紹介をする活動では、誰とも話さない児童がいた。時間を短くしてもよかったのではないか。友達が来てくれるのを待ち、すわっている子がいたので、もっと反応させればよかったのではないか。

▲多くの友達と話そうという意欲があまりなかった。子供たちが意欲的に質問しに行こうという声かけが必要だったのか。

□だれでしょう(Who am I?)クイズで、最初から正解の人を出した意図は何なのか。子供たちの知りたい意欲は1回くらい間違えたほうが引き出せたのでは。

→その通りだった。

(外部講師)子供達がわくわくしている。必然性のある活動。Whoの当事者本人がいなくても、写真があるだけでもよい。自分の想像を確認するための時間。予想が「当たった!」だけでなく、どうまとめるかを考える必要がある。

□子供が本当に聞きたいことだったのか。必要感があったのか。どうねらっていけばよかったのか。

→自己紹介カードを書かせるときに、人に見られないようにするなどの工夫をしていた。

□児童の活動時間は十分だったか。(外部講師に質問)

→個人でする活動だけで計れるものではないので、すべての活動を通して十分な活動時間であったと言える。しかし、自己紹介の活動自体は、自己紹介ブックにまとまっていることで、自分の思いを伝えられる状況ではなかった。AとBになっている時点で自分の伝えたい思いを「伝えたい人」に伝えられていない。

〈指導・講評〉

◎授業について

・児童たちの体がびよんびよん躍動している。→「楽しい!」ということが伝わってくる授業であった。

・相手に伝わるように自分の好みを伝えられていたかどうか(めあてを達成できていたか。)→子供に達成感を味わわせることができている。言えた、言えないの振り返りではなく、「自分のことをもっとだれかに知ってもらいたい」という振り返りを書いている児童がいた。学習の本質がわかっている。

・Yes, I do. No, I don't.を言えていない子がいたが、そのためにWho am I?クイズがあり、そのときの先生の答え方子供に気付かせる。

・振り返りカードの一番上の評価は、「完璧にできる」よりも「相手に伝えることを意識してできる」くらいにしてもよかったのではないか。

・活動場面では、シールを貼らせる、サインをさせるに重きを置かなくてよい。本来なら、全員を動かしてやるとよい。

・自分のことを伝えてみたいという思いをしっかりもたせる。今回はAとBのグループに分けて活動を行ったため、3人に自分のことを伝えてみようなどの声かけがあってもよかった。待っている時間が長く、だれてしまったところがあった。活動を分けて行う場合などは、帽子をかぶらせるなどの工夫もあるとよい。

◎評価の事例集 それに見る評価

文部科学省のYoutubeにある評価についての再確認

文部科学省のサイトより <https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryoku.html>

評価のためのハンドブック・評価事例集をダウンロードした上で、以下の評価に関する直山先生のビデオを、要点を把握してから以下の動画を見ると大変わかりやすい。 <https://eigojoho.eiken.or.jp/n/neec4f319f148>

学習評価改善の基本的な方向性

1.児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと

2.教師の指導改善につながるものにしていくこと

3.これまで慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していく。

〈学力定着推進課統括指導主事より 研究協議会終了後、C4th個人連絡にていただきました〉

1 児童の興味関心を惹きつける工夫

・最初から最後まで、全ての児童が目をキラキラさせて、とても楽しそうに英語に親しんでいた。

・時間の工夫:大きく15分単位の授業展開:児童の集中力が続く時間を考慮し、「誰でしょうクイズ」まで15分、「グループのメンバー以外へのインタビュー」まで27分、最後の歌終了が45分15秒。時間内できれいにまとめから振り返りまでつながっていた。

・場面設定の工夫:児童にとって「聞きたいこと」「本当のこと」「自分のこと」を言うことが、シンプルだけど大切。

・英語で進めること:開始から3分40秒の「前時までの学習の振り返り」まで、すべて英語だった。その後も、児童に分かる英語で指示を出し、必要最低限の説明は日本語で行っていた。児童は「分かるから先生の英語を聞こう」、「次は何が起きるのかな」と楽しみにしていた。指導案にも「外国語の参考書」を活用し、児童に伝える発問も簡素化したことが明記されている。

2 段階的な指導

「だれでしょうクイズ」と「Activity 2」の関連は「グループ以外の児童や先生に自己紹介する」という本時の最終活動に、つながっていた。

3 研究テーマに沿って

3年生という発達段階を考えると、素晴らしい成果。取っていうなら、「思いを豊かに表現できる授業」を、どのように捉えるか。「自己紹介ブックを見ながら自己紹介ができた。」は、十分な成果だが、実は「やり取り」を覚えている児童もいたとのこと。

外国語によるコミュニケーションの一連の過程を通して、「見方・考え方」を働かせながら、自分の思いや考えを表現する「言語活動」の在り方を、発達の段階に応じてどのように設定し、児童・生徒の資質・能力を高めていけるか、中学校外国語科も含めて研究していきたい。